トラック６花火大会
＊雛乃が主人公が帰る前に精一杯アピールするお話

「兄さん、これから花火大会だけど何か持ってくものとかある？」

「その、例えば懐中電灯とか虫除けスプレーとか」

「あるならこの中に入れて、私はまだ準備があるから先外で待ってて」

「大丈夫大丈夫、手伝いはお母さんにしてもらうから」

「さっ、時間もそんなにないんだし早く出てて」

戸を閉める

戸を開ける

「お待たせ…(恥ずかしそう)どう、かな？
こういうの初めて着るから似合ってるかわからなくて…」

「似合って…る？本当に!?えっ、あ、ありがとう」

「今日の為に準備してたんだ♪」

「この髪飾りもお気に入りで…」

「…ってちょっとお母さん！ニヤニヤしないでよ！
私一人ではしゃいで馬鹿みたいじゃん！」

「兄さんもそんな顔しない！全くもう、ほら行くよ」

「うん？なに？ああっ眼鏡？」

「その…今日はお祭りだし、
兄さんとのその…、
デートみたいなものでしょ？
だから、コンタクトにしてみたんだけど、変かな？」

「兄さんはまたそうやって…
ほんと、私を辱めるのが好きだね」

「でも似合ってるって事でしょ？ありがと」

「忘れ物は…うん、大丈夫だね」
兄さんはそのままの服装で行くの？」

「昔着てた甚兵衛とか残ってないのかな」

「うーん、たしかにそっちの方が兄さんらしいね」

「えっ、もうこんな時間!?そろそろ行かないと！」

母親
「ひな、お兄ちゃんと一緒で楽しいのはわかるけど
あんまり暗くならないうちに帰ってくるんだよ」

「もう、お母さんったら…分かってるって、そんなに遅くならないってば
それじゃあ、いってきまーす」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ほわあすごいよねー、こんな田舎でも祭りってなるとここまで人が集まるんだから」

「まぁ、ここらへんでは数少ないイベントの一つだしね」

「にしても、私も何年ぶりだろ…」

「うん、最近は来てなかったから　実は久しぶりなんだよね」

「まあまあそんなことよりも早く屋台見てまわろぅよ」

「兄さんは何か食べたいものとかやりたいこととかないの？」

「はぁ…物価が高いのは仕方ないよ
そういうこと言ってると何も楽しめなくなっちゃうよ？」

「あー、なんだかお腹空いてきちゃったし、折角だから何か食べたいなー」

「別に奢ってもらおうなんて考えてないよ？
でも折角のデートなんだからさ、
兄さんがどーしてもって言うなら、ねぇ？」

「え、本当にいいの？
冗談のつもりで言ったんだけど・・・」

「ううん、それなら喜んでご馳走してもらおうかな」

「そうだねぇ、まずは綿飴とかどうかな？　お祭りって感じがしていいでしょ」

「っとそうだ、奢ってもらうのともう一つお願いがあるんだけどさ…」

「いや、そんな大したことじゃないんだけど
そのぉ…ね？て、手を繋いでほしいなぁ、なんて…」

「無理なら無理でいいんだよ⁉
でもこの人混みだし逸れたら見つけるの大変かなって」

「それに、私今日は下駄だからさ…
あんまり履き慣れてなくて不安だなって」

「うん、ありがとう！
絶対に離さないでね！」

「さっ、改めて綿飴買いに行こっ！」

「うん？りんご飴？それならさっき来た道に…
あ、ほらあれだよ！」

「あっ待って、私この格好じゃ走れないからゆっくりでお願い」
ごめんね、見栄えを優先したばかりに・・・」

「兄さん、ここここ
へぇー、今ってこんなに種類があるんだ」

「私？私はこの１番大きなりんご飴しか見た事ないなぁ」

「ぶどうなんかもある…あ、見てこの小さいりんご飴、可愛い！」

「兄さんはその１番シンプルなりんご飴にするの？
あー、じゃあ私はこの小さいのにしようかな」

「大丈夫だって、このくらいならちゃんと食べれるよ」

「えへへ、心配してくれてありがとう」

「ほら兄さん、まだまだ行くよ！
デートは始まったばかりなんだから」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～色々と見て回った後

「はぁーー、満喫したね～」

「子どもの頃はさ、お小遣いの中でやりくりしないといけなかったから、
今は凄い贅沢してる気分だったよ」

「うん、射的も金魚すくいも楽しかったよ」

「今日は色々とありがとね
私のわがままに付き合ってくれて」

「それに・・・ちゃんと手もずっと握ってくれてたし
お陰で凄く安心できたよ」

「あ、もうすぐ花火始まっちゃうけどどうする？
もっと少し見えるところに行く？」

「そうだね、ここからでも充分見えるし
このままでいいか」

「でもこうして少し通りから外れるだけで
こんな静かになっちゃうと、少し緊張しちゃうよね」

「しないんだ・・・
まあ兄さんはそういうことに関心なさそうだもんね」

「はあ…、折角浴衣でお粧ししてのデートなんだから
もう少し気の利いたセリフの一つや二つ言えないの？」

「綺麗だって・・・
もう、何よその返事……」

「えっ!?、あっ、(不意を突かれる)
…そう面と向かって似合ってるって言うのは違うじゃん…」

「うぅ～…あ、兄さん見て見て！花火始まったよ！」

「わぁ、やっぱり綺麗だね」
…そうだね、あの頃となにも変わってない」

「…ふふっ、兄さんってば目が子どもみたいにキラキラしてるよ？」

「え？私も？
まったく、二人してなにやってんだかね」

「はあ(決意あるため息)・・・
あー…あのね、兄さん。まだ花火の途中なんだけどさ」

「先家に帰って線香花火、しない？」「ほら、昔よく一緒にやったじゃん」

「あの事をまだお母さんが覚えてて買ってちゃったんだって…」

「私一人じゃ寂しいし、話したいこともあるしね」

「うん、ありがとう。じゃあ帰ろっか」
　あっ、帰り道もしっかりと手、繋いでてね？」

「と言っても、すぐそこなんだけどさ
行こっか」

なんかSE

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜帰宅

「ただいまー…ってあれ、誰もいない」

「あーそういえばお母さんたちも花火見に行くって言ってたね」

「まぁ、いいや。兄さんは縁側で待ってて　私は花火とってくるから」

「うん、確かお母さんが浴衣の着付けの時に　持ってきてくれてたんだ」

「はいお待たせ。
兄さん見て、線香花火懐かしいでしょ」

「と言っても、私も久しぶりに見たんだけどね」

「あ、良かったぁ…丁度二人で分けられる本数だよ」

「はいそこ、そんなこと言ってないで
折角なんだからもう少し乗り気になってよ」

「やり方って、昔よくやったじゃんか
　そうだ、ついでに勝負しようよ」

「そんな難しくないよ
どっちが長く灯していられるかっていう単純なもの」

「大丈夫だって、なにか賭けたりするわけじゃないから」

「負けないぞー」

線香花火 SE

「はぁ〜、やっぱり兄さんはすごいなぁ…殆ど負けちゃったや…」

「どうやったらそんな風に長持ちさせる事が出来るの？」

「集中力かぁ
はいはい、どうせ私は落ち着きのない人ですよー」

「もう一回！あともう一回だけ！
・・・あっ、もう一本しか残ってないや…」

「勝っても負けてもこれが最後だね…」

「じゃあ行くよ？よーい、スタート！」

線香花火 SE を背景に会話

「…あのさ、兄さん、実は私…
東京の大学に進学しようかと思っててさ…」

「…あ、勝った！動揺しちゃったねぇ
兄さんこそ集中力が足りてないんじゃない？」

「えへへー、ずるじゃないよーだ」

「…それに、大学は冗談じゃないよ
うん、お母さん達にはもう話してる」

「兄さんにも話さなきゃって思ってたんだけど
話すタイミングが中々なくて…」

「でもね、兄さん…実は一人暮らしをする事に関しては反対されてるんだ
女の子一人で上京させるわけにはいかないって言われて・・・」

「そう、どうにか説得しないといけないんだけどさ…
そこで兄さんと一緒に住めないかなー…なんて…」

「それに、兄さんと一緒ならお母さんたちも賛成するって言ってくれて」

「私なり色々考えてたんだけど、
やっぱりこっちでやりたい事が思いつかなくてさ」

「うん、兄さんの言い分も分かる、分かるんだけど…」

「それでも、私、…私頑張るから」

「そっ、そうだよね
急にこんな話されても困るよね、ごめん」

「うん、返事は今すぐじゃなくても全然、
兄さんが帰ったあとにゆっくりでも大丈夫だから」

「ありがとう、こんな話に付き合ってくれて」

「あっ、兄さん！実はもう一つ伝えとかなきゃいけないことが・・・」

母親「ただいまー・・・ひなー、いるー？」

「って嘘…お母さん達帰ってきちゃった…
はあ、私やっぱり運が無いなぁ…」

「えーと…どうしようかなぁ…」

「えっああうん、ゆっくり考えて」

「…いつでもいいから、返事待ってるね」

「はい真面目な話はここまで！
まだ花火は残ってるしもう少しだけ楽しも」